

フランネルフラワーの発芽率を低下させない種子の貯蔵法

【要約】フランネルフラワーの種子は、採種直後の播種で約60%の発芽率であり、常温貯蔵では6か月後にはほぼ発芽しなくなるが、採種後ただちに低温乾燥条件下で貯蔵することにより、半年～1年後においても40～50%の発芽率が得られる。

中山間農業研究所・中津川支所

【連絡先】0573-72-2711

【背景・ねらい】

県育成花き「フランネルフラワー」は、県の主要鉢花品目として生産拡大され、中山間地域においてもシクラメンとの組み合わせ品目として導入が進んでいる。しかし近年、生産現場では種子の発芽不良により計画出荷できないケースが散見されることから、発芽率を保持できる有効な種子の貯蔵方法を明らかにする。

【成果の内容・特徴】

- 1 採種直後に、充実種子を選別して播種し、表1の条件で播種30日後に調査した結果、62%の発芽率が得られ、取り播きが可能である(図1)。
- 2 種子を常温(冷暖房がある直射日光のあたらない事務所内)で乾燥貯蔵した場合、3ヶ月後の播種から発芽率が低下し始め、6ヶ月後にはほぼ発芽しなくなるが、5℃の冷蔵庫内で乾燥貯蔵すると、1年後においても50%の発芽率が得られる(図1)。
- 3 常温貯蔵すると6ヶ月貯蔵以降にやや赤みを帯びた変色がみられるが、5℃貯蔵すると種子の変色は無い。

【成果の活用・留意点】

- 1 採種後に圃場で種子を保管すると、さらなる発芽率の低下が予想されるため、採種直後から乾燥低温貯蔵に心がけること。
- 2 当試験では培養土に播種用培土を使用した。実際は栽培マニュアルに従った用土を使用すること。

【具体的データ】

表 1 試験条件

実施場所	中津川支所 恒温機内
供試品種	エンジェルスター
採種日	H28.5.13
培養土	播種用培土
試験区	冷蔵貯蔵（5℃冷蔵庫内で乾燥貯蔵）
	常温貯蔵（冷暖房がある直射日光が当たらない事務所内で乾燥貯蔵）
播種方法	5号鉢に培土を入れ、各区50粒を播種
覆土	同一培養土を5mm程度

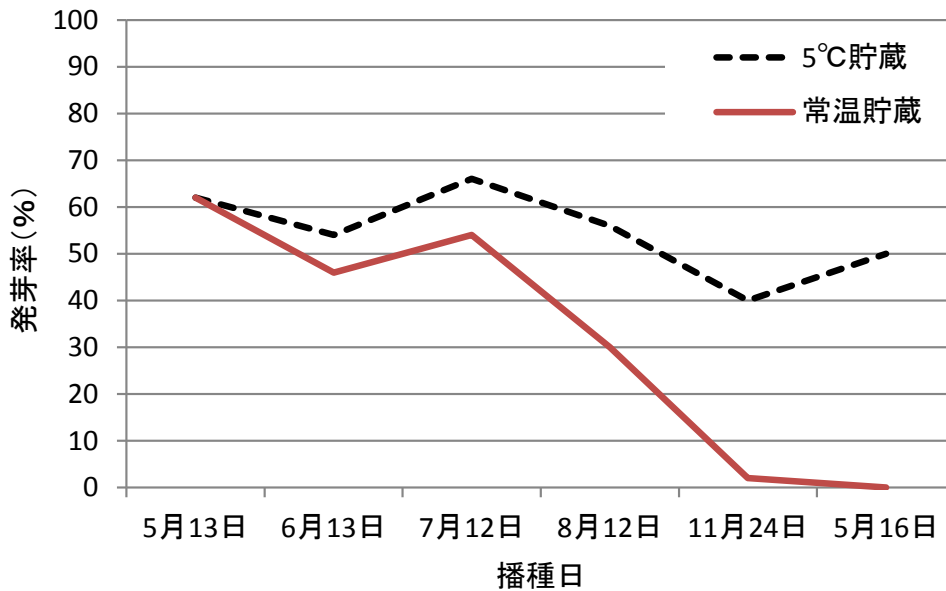


図 1 種子の貯蔵方法の違いが発芽率に及ぼす影響（平成 28～29 年）

研究課題名：フランネルフラワーの中山間地域に適した栽培技術の確立（平成 25～29 年度）

研究担当者：浅野 正